

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

## 順応的管理モデルにおける生態学的基盤の課題 南方熊楠の思想を手がかりに

著者	関 陽子
雑誌名	国際哲学研究
号	3
ページ	157-164
発行年	2014-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00006695/">http://id.nii.ac.jp/1060/00006695/</a>

# 順応的管理モデルにおける生態学的基盤の課題

## —南方熊楠の思想を手がかりに—

関 陽子

### はじめに

南方熊楠（1867-1941）は、明治期に生物学・民俗学における在野の研究者として国内外で活躍した人物である。彼は日本でいち早く「エコロジー」という用語を紹介しつつ、生態学的な観点から神社林の保護を訴えて「神社合祀反対運動」を展開したことから、日本における自然保護運動の先駆者としても知られている。ただし、彼は「曼荼羅」や「事の学」という独自の思想を背景に運動を展開したことから、「神社合祀反対運動」は神社林の生態学的価値や学術的価値を強調しただけの自然保護運動ではないといえよう。南方の運動は、人間的価値としての「意味づけられた自然」のあるところに自然保護の展開可能性を示したことに意義があり、その「意味」の源泉を彼の思想をたどって探究することは、今日の自然保護や保全のありかたを考える上でも有効な手がかりを与えるのではないだろうか。

さて、明治維新に端を発する近代化とともに環境危機が誰の目にも明らかになった今日、自然環境問題が喫緊の課題になっていることはもはやいうまでもない。こうした中で、自然再生事業や鳥獣被害対策などの多くの環境保全対策において、生態学を基礎にした順応的管理モデルが適用されてきた（鷲谷1998）。順応的管理とは、科学的知見とモニタリング評価に基づく検証によって、計画や政策の見直しを行うリスクマネジメントの理論を取り入れたモデルである。

しかし近年では、順応的管理のような自然科学の普遍妥当性に根拠をおく“人間不在”の科学主義的モデルの限界が至るところで指摘されている（鳥越2004；富田2008）。とくに順応的管理はもともと水産資源管理に関する概念であり（勝川2007）、管理自体を決定し維持する主体（地域住民など）にとっての自然の意味や価値、あるいは人間がどのように被害やリスクを認識しているのかなど、社会的視点や人間事象を組み込んだ概念をもちえない。したがって、順応的管理は人間社会を生態系システムの延長で一元的に捉えるモデルにしかかなりえず、対策の担い手である人々の意識を十分考慮することなく、順応的管理そのものを困難にしてしまう可能性を孕んでいるのである。

そこで近年では、科学的な知を主体的に利用し、環境施策を担う主体（当事者）側にたった新たなモデルが模索されている。いわば科学知を“手なずけて”ゆくこともできるような社会的なしくみづくりは、近代の科学主義を切り崩すという積極面もあるといえる。

しかしながら、こうした自然科学に基づく一元的モデルの克服は、科学主義を克服しようとしても、「専門家」と「住民」の違いを契機とした「科学知」に対する「生活知」、実在に対する現象、あるいは自然科学と人文社会科学を二元的に共存させるモデルを生じさせるに留まるのではないだろうか。「科学知」は取り組みの主体にとっての価値や意味に連続することなく、“よそよそしい客体”のまま「生活知」と共存することになるであろう。

しかし、人間（当事者）主体に基づくいかなる環境保全対策でも、自然科学的な知見が無用になることは決して無く、人間や社会が依拠してゆく自然的事実であり続けるのである。したがって順応的管理モデルの再構築のためには、社会的・人間的指標を導入するだけにとどまらず、人間的価値に包摂されうる科学知のあり方として、自然科学の批判的再構築という作業が必要になるのではないだろうか。この点で、南方熊楠の思想や運動は参照点的価値

値があると思われ、人々の生きる意味や社会的価値として包摂されてゆくような生態学の方途を見いだすことができるのではないかと考える。

## 1 「神社合祀反対運動」とは

南方熊楠が反対した神社合祀政策とは、日本が封建国家から近代国家へと脱皮する近代化政策の一つであり、祭政一致による国家体制の確立と、人心統制を目的として行われたものである（村上1970）。「神社合祀」とは、一村一社を原則として地域の神社を廃止・合併・移転することであり、一定の基準を満たさない無格社の神社は徹底的に合祀の対象となっていた。とくに伊勢、熊野（三重県、和歌山県）では合祀が励行され（『南方熊楠全集』7:49、以下『全集』とのみ表記）、南方熊楠は、神社合祀政策によって人々の信仰心や生活に与える影響を憂いて「神社合祀反対運動」を展開したのである。そもそも庶民にとって地域の神社とは、自然に対し日常的に畏敬の念をもって接することを可能にするものであり、神社の敷地に広がる神社林は、人々の信仰によって伐られることなく守られてきた森である。今日では神社林は「鎮守の森」とよばれ、土地本来の植生を維持する森としてもその価値が見直されている。

### 1-1) 「保存」と「保全」の神社合祀反対運動

南方熊楠による神社合祀反対運動は、日本の先駆的な「自然保護運動」として一般に理解されているが、自然保護（protection of nature）には対立する二つの方法ないし概念がある。一つは「保存（preservation）」であり、人間活動を規制し、干渉を避けることによって自然を破壊や損傷から守る方法で、「保存」のことを指して「自然保護」と言う場合も多い。この「保存」概念は、思想的には人間中心主義への批判にルーツをもち、人間活動や人間の価値とは無関係に存立しうる自然を守る場合に適用することができる。

もう一つは、人間のために自然資源の節約や自然の保護を行うという立場にある「保全（conservation）」であり、里山の二次的自然など、人間的価値を有する自然環境に対して人間が干渉しながら守る方法である。

「保存」は人間と自然を二元的に対置させた上での“関わらない”自然とのかかわり方であるのに対し、「保全」は“関わる”自然とのかかわり方であるといえるであろう。日本では公害問題から環境政策が発展してきた経緯から、「保全」がその中心を担ってきており、順応的管理もまた「保全」の典型的な環境マネジメント・モデルとして適用されてきた。「保存」と「保全」はどちらも生態学的知見や概念を基盤としているものの、日本における「保全」概念は、欧米の「保存」を基調とする自然保護思想（原生自然保護思想など）の対抗理念として展開されてきた側面もある（鬼頭1996）。

さて、南方は自身の神社合祀反対論の中で、神社林は「殖産用に栽培せる森林と異なり、千百年来斧斤を入れざりし神林は、諸草木相互の関係はなほだ密接錯雑致し、近ごろはエコロジーと申し、この相互の研究をする特殊専門の学問さえ出て来たりおる」（『全集』7:528）と述べているように、「エコロジー」という用語を紹介しながら、神社林は天然林として生態学的な価値を有する森であり、破壊から守らなければならないと主張している。すると「神社合祀反対運動」は神社林という天然林の「保存」を目的とする自然保護運動であるということになるであろう。また彼は、神社合祀反対意見の中で欧米の環境保護についてもいくつか紹介しており、日本にいる間も「保存」論者で著名なJ・ミューアのヘッチ・ヘッチー溪谷のダム建設反対運動についても情報を仕入れていたのであった（武内2004）。

ただし、以上の理由をもって神社合祀反対運動を「保存」の立場にたつ自然保護運動であると断定することはできない。J・ミューアは「人間中心主義」批判の文脈で、生活から遠く離れた原生自然の「保存」論を強調したのに対し、南方の神社林保護運動は、「タブー・システム」という人間と自然との合力によって存立してきた森を保護することであり、自然と結びついて生きる“人間を守る”ための「保全」運動であるとみなすこともできる。

たとえば社会学者の鶴見和子は、南方は「自然を破壊することによって、人間の職業と暮らしとを衰微させ、生活をなりたたなくすることによって、人間性を崩壊させることを警告した」（鶴見1998:341）として、神社合祀反対運動を「エコロジーの立場に立つ公害反対運動」とし、南方熊楠を「地域主義のエコロジスト」と評している。

つまり南方の神社合祀反対運動は「保存」と「保全」の両面をあわせもつ自然保護運動であり、「保存」と「保全」にまつわる“自然中心主義か、それとも人間中心主義か”という長らく続いてきた対立を、最初から無意味なものにしている。このことは、南方の自然科学や「エコロジー(生態学)」に対する理解と関係していると思われ、彼の神社合祀反対論は、人間と自然を紐帯する本質を問いかけるような内容を有しているのである。

## 1-2) 神社林の価値

明治政府による神社合祀政策の目的には、神社に国家の地方制度を担うような社会的役割を与えることも含まれていた。神社合祀は政府の勅令によって大きく二期(前・後期)に分けることができ、南方熊楠が神社合祀反対運動を展開したのは1906年(明治39年)の二期目(後期)の合祀政策時である。後期の神社合祀は、日露戦争後の財政破綻の立て直しと、新町村の創出をはかる地方改良運動という目的があったが、それ以前に行われてきた町村合併によって各村域が広がったために、合祀先の神社との距離が拡大する傾向にあった(桑原2005)。そのため、人々は生活や精神の拠り所の大幅な変更を余儀なくされ、合祀された神社の跡地(神社林)の入会権や所有権をめぐる駆け引きまで行われていた(原田2005)。とりわけ後期の神社合祀は、神社の所有する神社林を処分するという経済的問題でもあり、「入会権」は自然を守るために働いたのではなく、経済的価値のために破壊する権利のようになっていたという。そこで南方がもっとも憤ったのは、神社という建築物が合祀されること自体よりも、信仰をやどしてきた森が経済的価値に転化されることにあった(『全集』7:548-549)。

南方の「神社合祀反対運動」はこれまで、彼が自分の研究材料を保護するという単純な動機に基づいて展開したとも考えられてきた。しかし、「小生思うに、わが国特有の天然風景はわが国の曼荼羅ならん。」(『全集』7:559)という南方の言葉に示されているのは、「神社合祀反対運動」によって守ろうとした自然が「曼荼羅」という自然世界であり、科学的に切り取られた自然ではなく人間の営為を含みこんだ自然であり、あるいは自己の延長としての自然であったということであろう。加えて、南方熊楠にとっての“エコロジー”とは、専ら客体として対象化した自然を理解する科学ではなく、「曼荼羅」という、人間と融和した自然世界を捉えることを可能にする学問であったのではないだろうか。

## 2 南方曼荼羅と「事の学」

南方の思想は、「科学の眼によって明らかにされた生命の流れを、真言密教的世界観でもう一度とらえ返す(千田2002:182)」試みともいわれている。彼の考える「生命」とは大日如来(「大不思議」)から別れ出たものであり(『全集』7:365)、真言密教の世界観を図像化した「曼荼羅」は南方の思考に大きな影響を与えている。南方にとって、大日如来は生命や自然そのものの本体、または人智の及ばない「根源的場」(唐澤2011)であるため、人間の知性によって知りうるのは宇宙全体のほんのひと握りにすぎないという。そうして「科学というも、実は予をもって知れば、真言の僅少の一分(南方熊楠(『全集』7:372))にすぎないというのである。ただし南方は、「曼荼羅」を理解するためには西洋の自然科学にも通じていなければならないと考えており、近代科学を否定したところに「曼荼羅」への理解の道はないことも心得ていた。

### 2-1) 南方曼荼羅

さて南方の思想形成に影響を与えた人物に、土宜法竜(1855-1923)という真言宗の学僧がおり、南方は土宜との往復書簡群の中で独自の世界観や科学論を醸成していた。南方が土宜とかわした書簡の中に、乱雑な線で描かれた絵図(図1)があるが(『全集』7:364-366, 1903年7月18日付書簡)、この絵図は、中村元が“南方曼荼羅”と名付け、鶴見和子がその解釈とともに世に紹介したことで知られているものである。南方の解説によると、図の中の入り乱れた線は因果律(原

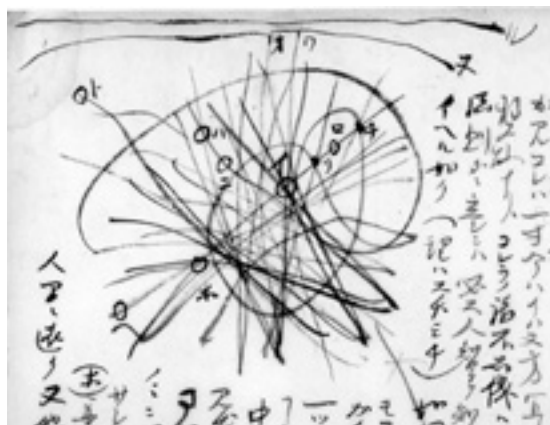


図1 (南方熊楠顕彰館所蔵)



因と結果)を示しており、全体として因果律の必然性と「縁」と「起」による偶然性が交錯する世界を表している。「縁」とは因果の系列が偶然に出会うことであり、「起」とは「縁」の出会いによって進行方向が変わり、その後の経過に変化があらわれることである。そして南方は「今日の科学、因果は分かるが、縁がわからぬ。この縁を研究するがわれわれの任である」(『全集』7:392)と述べているように、「縁」の探究こそが自然科学に関する南方の思想を特徴づけているといってもよいであろう。

加えて彼は、因果の系列が最も多く通過する場所を「翠点」とよび、ここから見れば様々なすじみちを見通すことができるという。松居(2005)によると、「翠点」は「中心」とは異なる概念であり、観察者にとっての便宜的な地点であって、絶対的な意味をもつものではない。よって自然科学が対象を固定化して理解しようとしてきたのに対して、南方の「翠点」に立つと、世界はダイナミズムをもって捉えられる瞬間の世界として把握することができるものであるという。

南方曼荼羅の「翠点」は、世界が世界としてたち現れる結節点であり、また人々が自然の中に霊性をとらえ、神社林が存立してきたという事実もまた「翠点」という結節点に生じた独自の出来事として捉えることができるのではないだろうか。南方にとって各々の神社林とは、曼荼羅の「翠点」に生じた唯一無二の森として映っていたことであろう。

## 2-2)「事の学」—南方熊楠のエコロジー

「曼荼羅」とは、「因果」と「縁起」の生じる場である。そして、こうした理解や方法を可能にしているのは「事の学」という南方の独自の学問であり、近代科学としてのエコロジー(science of ecology)を超え出た“南方熊楠のエコロジー”でもあると考える。

「事の学」とは、土宜との往復書簡の中で展開された南方の独自の構想であるが、とくに1893年の土宜への書簡に登場する絵図(図2)によって広く知られてきたものである。これには、「小生の事の学というのは、心界と物界とが相接して、—(略)心界が物界と雜わりて

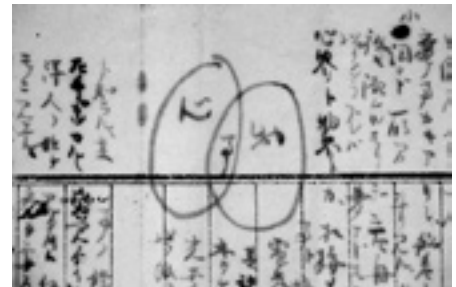


図2 (南方熊楠記念館所蔵)

初めて生ずるはたらきなり」(『全集』第7巻:145-146)という南方の解説がつけられている。「事の学」について詳細に分析した橋爪(2005)によると、南方の述べる「心」とは、精神のはたらき、または精神世界のことであり、「物」とは現実の世界で形をとって存在しているものや、現象として生じる出来事など外界のものごとを指し、いわゆる近代科学が対象とする客観的世界のことである。また「事」とは、外界と接したときに内面に生じる想念や観念であり、精神(心)が物質界(物)をとらえようとする過程で生まれてくる現象であるという(橋爪2005:20-32)。

すると、「心」が南方自身の心であるとすれば、「事の学」は南方自身による“世界(自然)の捉え方”として考えることができ、また「心」を人々の「信仰」として理解するならば、「事の学」とは人々の信仰(心)と自然(物)のまじわりを通じて維持されてきた神社林を、そのものとして理解するための学問であるといえないだろうか。

## 3 近代合理主義批判としての神社合祀反対運動

神道と仏教は原理的に異なる信仰であるが、「神仏習合」という文化に馴染んでいた日本において、「曼荼羅」としての自然を守る「神社合祀反対運動」は決して不整合というわけではない。たとえば神仏習合の一つの象徴でもある「神道曼荼羅」は、自然そのものを神や仏としてあらわす日本的な神仏習合様式の表現であり、庶民にとってリアリティのある信仰の形式であったからである(鎌田2011)。

しかし近代化政策として行われた神社合祀は、神仏習合という宗教的伝統を強制的に再編する変革でもあり、神社の問題とともに「廃仏毀釈」など仏教的な伝統にも大きな打撃を与えた。総じて、西洋近代を模範とした日本の近代化は、人々の信仰のあり方を大きく改変させ、寺社の天然林は外部不経済として無償化されたばかりでなく、神社林から信仰をはぎ取ることもなったのである(むろん「近代」のすべてが負の遺産ばかりをもたらしたわけではないことも留意しておかなければならないが)。

つまるところ南方の思想と実践の意義とは、宗教の形式を超えた「近代」や「近代合理性」への批判、あるいは啓蒙的理性（道具的理性）を批判したことにあると考える。近代の特徴を合理化や合理性として捉えたM・ウェーバーは、「合理的近代」の行き着く先を宗教的世界像の脱魔術化（Entzauberung）による意味喪失（Sinnlosigkeit）として捉えたが、まさに南方の「神社合祀反対運動」は近代化にともなう「意味喪失」を警告していたものであり、「合理的近代」を牽引してきた経済合理性や、論理実証的な主知主義的合理主義への批判という意義をもつのである。このことは、「科学的」という形容を与えることで政策や運動を正当化するという、今日の環境政策のあり方にも一つの反省を促すことにもなるであろう。

### 3-1) 「意味づけられた自然」の社会的合理性

空間論の枠組みで南方の思想を読み解いた千田（2002）は、生活世界の空間における意味の生成を、物と心のまじわる「事」の生成として捉えている。「物」と「心」のまじわりに生じる「事」は、神という意味や自然への敬虔さといった「意味」として空間に蓄積される。さらに、その空間に人々が身を置くことによって、新たな「事」が生じて空間に意味が蓄積され、また人々がその意味と出会うことで、自然への敬虔さが心に刻まれるという（千田2000:238-242）。

また桑子（1999）は、身体の置かれる「空間」と、「空間の意味づけ」という観点から「空間の履歴」という概念を提起している。そして、「空間」とは物と心を媒介し、「歴史的な出来事によってさまざまな意味づけを与えられている」ものであるが、近代化とは「空間」の意味を貧しくするものであったという。（桑子1999:34-36）。つまり「鎮守の森」という空間が廃絶され無機質な空間へと近代化されるということは、空間の「意味」の喪失をもたらすとともに、信仰へと連なる「意味」との出会いの喪失も招くことになる。南方の神社合祀反対運動は、「空間の意味を一元的に把握しようとする圧力への抵抗（千田2002:245）」であると語ることができるが、その圧力とは、近代化政策における制度的圧力であり、そして近代合理性というイデオロギー的圧力であったのではないだろうか。

また「物」と「心」のまじわりから生じる「事＝意味」とは、単なる個人的觀念に留まるものではなく、また人々の信仰や価値観のうちに自然保護のしぐみが含まれているといった、自然科学の文脈へと還元することのできない意味であろう。「意味」は経済的価値に換算可能な自然資源とは異なり、施策の動機や、生活活動における動力、活力、あるいは共同性を担保しうる社会的な“抽象的資源”として社会的に価値あるものであると考えられる。南方の「事の学」は、自然科学にも「意味」を生成することのできる領域があることを示すものであり、また人間的・社会的価値である“抽象的資源”としての「意味」の存在を明らかにしてゆく学問構想である。

これに関連して、愛媛県今治市の「織田が浜埋め立て反対運動」を分析した関（1997）は、自然保護の具体的な運動や施策は生態学的な知見に基づく人間-自然関係だけではなく、人々の自然に対する意味づけや「意味づけられた自然」からはじまると述べている。これはつまり、「意味」は人々の動機に関わるが、自然科学は自然の意味づけや人々の動機づけに関与することはできないという指摘でもある。

しかし「事の学」からすれば、価値中立的な近代科学は、自然を「物」として対象化しそれを因果関係においてとらえるものであっても、自然科学は本源的に自然の意味づけや人々の動機づけに関わるることのできる領域があると考えることができるであろう。

### 3-2) 科学主義批判としての「事の学」

南方熊楠はもともと自然科学と社会学を総合的に論じるH・スペンサーの力強さに惹かれていたものの、やがて自然科学を一元的に社会に敷衍するスペンサーの方法を批判するようになった。それは一方で「雑わり(まじわり)」という知のあり方を提示する「事の学」の誕生を意味していた。

南方の「事の学」は、その理論化は十分とはいえないものの、自然科学が人文社会科学と重なる領域を開拓する“科学的理性批判”という課題を遂行していたようにも思われる。この場合の「批判」とはむしろカント的な意味であり、科学的理性を否定したという意味ではない。

さて自然科学と社会との関係については、N・ハンソンの理論負荷性やT・クーンのパラダイム論などで、科学哲学の新潮流としてすでによく知られているテーマである。この新潮流の中で「科学の解釈学」を展開した野家

(2007) は、科学の解釈学をテキスト解釈（テキスト・モデル）に基づく科学的理性批判の試みとして位置付けている。

「科学の解釈学」の特徴は、“人文社会科学の自然科学化”、すなわち科学による人間社会の一元的理解をめざした科学主義への批判と同時に、自然科学と人文社会科学の二元的区別でもない統合的領域をめざしている点である。この統合性を担保しているのは、自然科学を専ら「対象」や「方法」から規定するのではなく、人文社会科学にも共通する「認識関心」から規定することである（野家2007:102）。たとえば J・ハーバーマスは、自然科学と人文社会科学の相違にそれぞれ「技術的認識関心」と「実践的認識関心」を挙げたが、しかし「科学の解釈学」（科学の解釈学的展開）に依拠すると、自然科学にはこれら二重の関心に応答する存在様式があるという。技術的関心で求められるのは対象の技術的操作とそれを支える予測可能な知識であるが、実践的関心は「人間の自己理解および相互理解の拡張」や「世界（宇宙）の中の人間の位置」への関心である。つまり「科学の解釈学」の科学的理性批判によって、自然科学は技術的関心だけではなく「自然（宇宙）の中の人間の位置」の解明と確認とをめざす実践的関心にも向けられており、その点で人文社会科学と統合可能な側面を明らかにできるというものである。

つまるところ南方の「事の学」も、「世界」と「世界における人間の位置の解明」という自然科学と人文社会科学に共通する認識関心に導かれて形成されたのではないだろうか。“位置の解明”とはすなわち、記号体系と意味との関係と同様に、「関係性における自己の位置」を理解することによる意味の探究なのである。

## 4 生態学（エコロジー）の刷新—順応的管理モデルの再構築のために

2011年3月11日の東日本大震災以降、総体としての「近代」の反省とともに、今日ほど「エコロジー」のあり方が問われている時代はないのではないだろうか。

こうした中で、震災を契機に今また神社林（「鎮守の森」）が新たな注目を浴びている。大津波の被害をうけた海岸沿いに、新たな津波被害を緩和する目的で南北300km以上の防潮林堤を築く「森の長城」計画が進行しているからである（宮脇2012）。この防潮林堤は、震災瓦礫を混ぜた土に「潜在自然植生（potential natural vegetation）」をもとに選ばれた樹木を植樹するというものである。潜在自然植生とは、植物生態学的にみた土地本来の植生のことであり、まさに神社林が維持してきた植生でもある。

この「森の長城」計画では、生態学的知が「自然との共生」という課題のもとで、「いのち」や「安心」という社会的に要請された価値へ包摂されているのである。生態学的知が人々の生きる「意味」や社会的「価値」として機能することは、順応的管理モデルの生態学的基盤の再構築にとっても必要なことであると考えられる。

### 4-1) 「順応的管理」の問題点

日本の環境政策は「足尾銅毒事件」や「四大公害病」に代表される公害問題から発展し、1962年に『沈黙の春』で提起された問題と同様に、人間が自然生態系の一部を構成する存在であることを最初から認識させるものであった。加えて公害問題は、被害や被害者の認定の場面で常に「科学的根拠」が重視されてきた経緯があり、環境政策という社会的に説得力の必要な場面において、自然科学的な根拠はその政策の正当化によって必要不可欠であったということも意味する。

さて生物多様性条約の愛知目標にむけた「生物多様性国家戦略2012-2020」（環境省2012）では、東日本大震災による影響をふまえた自然共生社会のあり方が盛り込まれ、とくに科学的基盤の強化が強調されていることがわかる（環境省2012）。いまや「生物多様性保全」は保全生態学を基礎にした国家的政策でもあるが、しかしそうした“上からの”保全事業が、ステークホルダーである地域社会の人々にとって簡単には受け入れられないものであるという指摘もされてきた。社会的善であるはずの保全事業が受け入れられない大きな理由は、事業がそもそも地域社会の人々の意思や認識から立ち上がったものではないからであり、また生態学的見解は必ずしも施策を担う人々の価値と結びつかないからである。つまり人間を生態系システムの延長として捉えることは、価値中立的な科学的合理性を“環境とヒトとの共存”という目的のもとで徹底化することにはほかならない。ひいては、順応的管理モデルは基本的に「意味」や「価値」を育んできた対自然関係を迂回した環境マネジメント・モデルであるといえる。

こうした順応的管理モデルを採用している代表的なものに、日本政府による鯨類捕獲調査（調査捕鯨）があげら



れる。鯨類捕獲調査は「持続可能な捕鯨」の確立をめざして、鯨類に関する科学的知見の向上と、予測不可能性を考慮した適切な資源管理体制の構築を目的としたものである（大隅2003）。

しかし現在、生物資源の「保全」を目的として続けられてきた鯨類捕獲調査には、国際捕鯨委員会（International Whaling Commission : IWC）における反捕鯨国との対立を背景に、モラトリアム解除の条件である科学的根拠の正当性がくりかえし求められてきた（石井2011）。その結果、鯨類捕獲調査の目的が、持続可能な捕鯨産業のための「資源管理技術の確立」ではなく、鯨類研究のための科学研究という目的に純化されている傾向にある。つまり捕鯨問題が露呈しているのは、科学研究の成果はあくまでも価値中立的な「事実」の問題であり、それをどれほど追究しようとも「商業捕鯨」という社会・経済的な文脈における人間とクジラとの関係性を規定することは困難であるということである。鯨類捕獲調査への努力は、その困難さを増大させるための努力であるとして見ることもでき、順応的管理は持続可能な捕鯨の確立という目的のもとでは機能不全に陥っているのである。

ただし、自然科学知見に基づいた適切な鯨類資源管理が社会的な営みへと文脈化される機会を阻んでいる原因が、「商業捕鯨モラトリアム」措置をはじめ、元来捕鯨国組織であるIWCに「反捕鯨」という“思いがけない”状況が発生したことにある、というのは言うまでもないであろう。

#### 4-2) 社会のための科学とは

順応的管理の問題を克服するために、近年では「科学知」や「専門知」を市民や利害関係者に還元する試みとしての「科学的コミュニケーション」も注目されている。とりわけ震災による原子力発電所の事故を境に「シヴィリアン・コントロール」（市民による科学技術のコントロール）の必要性が広く認知されたこともあって、その必要性が高まっている分野でもある。ただし現行の科学コミュニケーションはおおよそ事実やリスクを“わかりやすく”伝えるという方法論を課題にしており、往々にして理科教育的な啓蒙的コミュニケーションにとどまっているという印象をうける。

また他方で、科学コミュニケーションは「順応的管理」の拡張概念として誕生した「順応的ガバナンス（adaptive governance）」の中に取り込まれつつもある。「順応的ガバナンス」とは、施策を担う主体を取り込み、自然環境や被害等の量的事実という技術的認識関心に基づく論理プロセスに社会科学的アプローチを接続した概念である。あるいは、「生態系システム（ecosystem）」と「社会システム（social system）」の共進化、もしくは共進化が可能になっている状態での資源管理のしくみ（松村2013）のことである。

「順応的ガバナンス」は、現場の問題から提起された有効な環境マネジメント・モデルであると考えられる。しかしながら、「順応的ガバナンス」は生態学や自然科学的アプローチによる一元化への批判を前提として成立してきた経緯から、「生態系システム」と「社会システム」、「科学知」と「生活知」、あるいは「知識生産者」と「地域社会の知識ユーザー」といった対立項を抱え、自然科学と社会科学の二元論、つまりは「物」と「心」の二元論を維持したままの“共進化”となるであろう。そこで「科学と社会」、「専門家と住民」をつなぐコミュニケーションという実践が要請されることになるであろうが、しかし原理的にみれば、コミュニケーションの失敗によってガバナンスが滞ってしまうという危うさを払拭することはできない。

いうまでもなく、自然の問題は人間社会の問題であり、人間社会は自然の問題でもある。「科学知」と「生活知」、あるいは「科学的価値」と「人間的価値」といった、環境ガバナンスにおける二元論を克服するためには、科学や科学知のあり方そのものを問い直す作業からはじめることが必要になるのではないだろうか。その意味で、南方が展開した「曼荼羅」や「事の学」としての科学論は、科学的理性批判として、また自然科学の社会的合理性を示唆しているという点で参照点的意義があると考えられる。社会的合理性とはつまり、科学は人々の意味や価値、世界観や生命観に関与できるものであり、それが環境保全を担う主体の「動機」や「納得」、「覚悟」をもたらす力や基盤にもなりうるということである。「納得」や「覚悟」は順応的ガバナンスの要であることからして（宮内2013）、南方の思想は順応的管理モデルの生態学的基盤の再構築という課題において、意義深いものであろう。



## 引用文献

- 石井敦(編) 2011『解体新書「捕鯨論争」』新評論, 東京.
- 大隅清治2003『クジラと日本人』岩波書店, 東京.
- 勝川俊雄2007「水産資源の順応的管理に関する研究」『日本水産学会誌』73 (4), pp.656-659.
- 鎌田東二2011『現代神道論—霊性と生態智の探求』春秋社, 東京.
- 唐澤太輔2011「南方熊楠の「大不思議」論—根源的な場に関する考察」『ソシオサイエンス』17, pp.17-32.
- 鬼頭秀一1996『自然保護を問い直す—環境倫理とネットワーク』筑摩書房, 東京.
- 桑子敏雄1999『環境の哲学』講談社, 東京.
- 桑原康弘2005「明治前期の神社合祀—和歌山県田辺市・西牟婁群を中心にして」『和歌山地理』25, pp.13-29.
- 環境省2012「生物多様性国家戦略」  
(<http://www.biodic.go.jp/biodiversity/about/initiatives/index.html>)
- 関礼子1997「自然保護運動における『自然』—織田が浜埋め立て反対運動を通して—」『社会学評論』47 (3), pp.461-475.
- 千田智子2002『森と建築の空間史—南方熊楠と近代日本』東信堂, 東京.
- 武内善信2004「南方熊楠と世界の環境保護運動—坪井正五郎・大野雲外宛「神社合祀反対意見」を中心に」『熊楠研究』6, pp.70-94.
- 鶴見和子1998『鶴見和子曼荼羅Ⅴ水の巻—南方熊楠のコスモロジー』藤原書店, 東京.
- 富田涼都2008「順応的管理の課題と「問題」のフレーミング:霞ヶ浦の自然再生事業を事例として」『科学技術社会論研究』5, pp.110-120.
- 鳥越皓之2004『環境社会学 生活者の立場から考える』東京大学出版会, 東京.
- 野家啓一2007『増補 科学の解釈学』筑摩書房, 東京.
- 橋爪博幸2005『南方熊楠と「事の学」』鳥影社, 東京.
- 原田健一2005「神社合祀反対運動における自然環境保護と入会権の相克—その「運動」の限界と可能性をめぐって」『熊楠研究』7, pp.6-31.
- 松居竜五2005「南方マンダラの形成」『南方熊楠の森』方丈堂出版, 京都, pp.132-158.
- 松村正治2013「なぜ環境保全はうまくいかないのか 順応的ガバナンスの可能性」『なぜ環境保全はうまくいかないのか 現場から考える「順応的ガバナンス」の可能性』宮内泰介編, 新泉社, 東京, pp.222-246.
- 南方熊楠1971-1975『南方熊楠全集』(全12巻)平凡社, 東京.
- 宮内泰介2013「なぜ環境保全はうまくいかないのか 順応的ガバナンスの可能性」『なぜ環境保全はうまくいかないのか 現場から考える「順応的ガバナンス」の可能性』宮内泰介編, 新泉社, 東京, pp.14-47.
- 宮脇昭2012『「森の長城」が日本を救う』河出書房新社, 東京.
- 村上重良1970『国家神道』岩波書店, 東京.
- 鷺谷いづみ1998「生態系管理における順応的管理」『保全生態学研究』3, pp.145-166.